

2022(令和4年) NHK大河ドラマ

「鎌倉殿の13人」

脚本：三谷幸喜

語り：長澤まさみ

- ・平安末から鎌倉前期を舞台に、源平合戦と鎌倉幕府誕生の過程で繰り広げられる権力の座を巡る駆け引きと、鎌倉幕府を引継いだ北条得宗家の「北条義時」を主人公に描く。
- ・タイトルの「鎌倉殿」は鎌倉幕府を指し、「13人」とは、2代将軍・源頼家を補佐するため発足した集団指導体制・「十三人の合議制」を構成した御家人たちを指している。

< >=ドラマでの俳優

- *主人公＝北条義時<小栗 旬>…長寛元年(1163)～元仁元年(1224)。幼名：江間小四郎
 - ・鎌倉幕府第2代執権。伊豆国の豪族・北条時政の次男で、北条政子(頼朝の正室)の弟
 - ・治承4年(1180)8月、父・時政、兄・宗時と共に源頼朝の挙兵に従うが、“石橋山の戦い”で平家方の大庭景親に敗北して宗時が戦死する。
 - この時、頼朝らは箱根山から真鶴半島へ逃れ、その後、安房国に脱出する。
 - ・時政・義時親子は甲斐国へ向かって甲斐源氏と行動を共にし、再び、頼朝と合流して“富士川の戦い”で平家に勝利する。
 - ・元暦2年(1185)、源義経・範頼が率いる平氏追討軍に属して武功を立て、建久元年(1190)に頼朝が上洛した際には、右近衛大将拝賀の随兵7人の内に選ばれて参院の供奉を行う。
 - ・建久3年(1192)9月、頼朝の仲介で比企朝宗の娘・姫の前を正室に迎える。
 - ・頼朝存命中はそれほど表立つ事はなかったが、頼朝死後に鎌倉幕府内の権力闘争が激化すると頭角を現してくる。→ “十三人の合議制”に加わる。
 - ・建仁3年(1203)、頼家が病に倒れると、時政は頼家の乳母父で舅である比企能員を自邸に呼び出して謀殺し、頼家の嫡子・一幡の邸に軍勢を差し向けて比企氏を滅ぼし(比企能員の変)、12歳の実朝を3代将軍に擁立して、自らは政所別当に就任し実権を握る。
 - ・この時期、時政・義時父子が一体となって有力御家人排除が行われるが、元久2年(1205)の畠山重忠の乱、続く牧氏事件によって父子は対立するようになる。
 - 元久2年(1205)閏7月、姉・政子と協力し、有力御家人・三浦義村(母方の従兄弟)の協力を得て時政を伊豆国に追放した義時は、父に代わって政所別当の地位に就くと、政子と3代将軍・実朝を表面に立てながら、政所別当・大江広元らと連携し幕政の最高責任者として実権を握った。(第2代執権に)
 - ・承久元年(1219)正月、鶴岡八幡宮での右大臣拝賀の際に、将軍・実朝が頼家の子・公暁によって暗殺される。このため、幕府は新たな将軍として親王の鎌倉下向を朝廷に要請するが、後鳥羽上皇はこれを拒否したため不調に終わり、頼朝の遠い縁戚である摂関家の藤原頼経を4代将軍として迎え入れたが、頼経は当時生後1年余の幼児であったため、政子が尼将軍として頼経の後見と空白となっていた鎌倉殿の地位を代行し、義時がこれを補佐して実務面を補うことで北条氏による執権政治が確立する。
 - (→実朝死後半年にわたる将軍後継者問題で、後鳥羽院政と鎌倉幕府の対立が先鋭化)
 - ・武家政権打倒を目指す後鳥羽上皇は、承久3年(1221)5月、流鏑馬ぞろいと称して諸国の兵を招集して倒幕の兵を挙げ、義時追討の宣旨が全国に発布された。
 - これに対して、幕府では尼将軍・政子が頼朝以来の恩顧を訴える声明を出して団結させ、京への出撃が決定された。(義時は、長男・泰時を総大将として東海道から、次男・朝時、弟・時房を大將軍として北陸・東山の三道から京へ上らせた。)

5月21日に鎌倉を発した幕府軍は木曾川、宇治川の京都防衛線を突破して、6月15日には京を制圧した。(承久の乱)

敗北した後鳥羽上皇は隠岐島、順徳上皇は佐渡島に配流されて、新たに後堀河天皇が擁立され、その監視機関として京都に六波羅探題が新たに設置された。

- ・元仁元年(1224)6月13日、義時は62歳で急死した。『吾妻鏡』によれば衝心脚気のためとされるが、後妻の伊賀の方に毒殺されたとする風聞(『明月記』)や近習の小侍に刺し殺されたとの異説もある。

*「十三人の合議制」

- ・鎌倉幕府2代将軍・源頼家(当時18歳)の独断専行を防ぐため、有力御家人13人が合議し、その進言をふまえ頼家が最終判断を下す方式がとられたもの。
ただし、13人が全員集まって合議するのではなく、案件ごとに何人かで話し合う形とされる。

・メンバー

< > = ドラマでの俳優

北条義時<小栗 旬>…主人公

北条時政<坂東彌十郎>…義時・政子の父。鎌倉幕府の初代執権。→元久2年(1205)追放に比企(ヒキ)能員<佐藤二郎>…頼朝の乳母・比企尼の養子 →建仁3年(1203)謀殺

梶原景時<中村獅童>…相模の豪族。侍所別当。→正治元年(1199年)失脚

三浦義澄<佐藤B作>…三浦党(相模)の総領。時政と義兄弟(妻=伊東祐親の娘)

和田義盛<横田栄司>…相模の豪族。侍所別当。三浦義澄の甥→建暦3年(1213)滅亡

安達盛長<野添義弘>…頼朝が流人時代からの側近。妻=比企尼の娘→正治2年(1200)病死

大江広元<栗原英雄>…頼朝に次ぐ鎌倉幕府のナンバーツー。鎌倉幕府行政長官(政所別当)

三善康信<小林 隆>…頼朝の協力者(挙兵に大きな役割を)。鎌倉幕府司法長官

足立遠元<大野泰広>…武蔵の豪族。治承・寿永の乱で頼朝軍に。公文所の御家人

中原親能…大江広元の兄。政所公事奉行人、のちに京都守護

二階堂行政…政所執事

八田知家…常陸守護

*登場人物とその関係図

< > = ドラマでの俳優

・北条氏

時 政 — 宗 時<片岡愛之助>…頼朝の挙兵時に戦死(石橋山の戦い)
— 政 子<小池栄子> → 頼朝の正室に

<坂東彌十郎>

継室 — 義 時<小栗 旬>

りく — 実 衣(阿波局)<宮澤エマ>…頼朝の弟・阿野全成に嫁ぐ。実朝の乳母(牧の方)<宮沢りえ>

伊東祐親<浅野和之>…義時の祖父(母の父)で八重姫の父。平重盛の家人

長男:河津祐泰<山口祥行>…暗殺される

次男:伊東祐清<竹財輝之助>

家人:江間次郎<芦澤興人>…八重姫の再婚相手

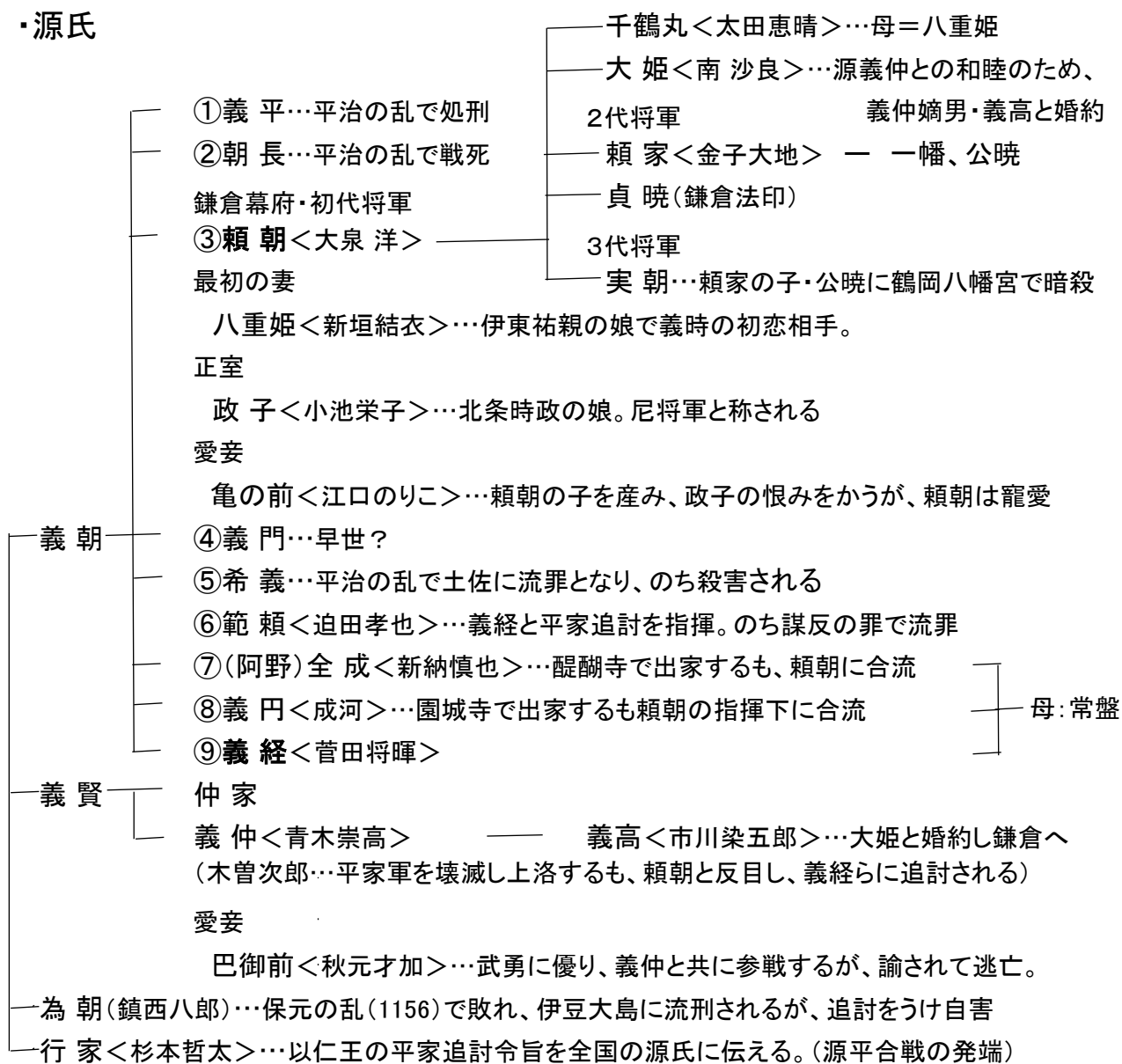
下人:善 児<梶原 善>

牧 宗観<山崎 一>…牧の方(りく)の兄。政子の命で頼朝の愛妾・亀の邸ヲ破壊。

義時の盟友:三浦義村<山本耕司>…梶原景時の変・畠山重忠の乱・和田合戦に関与

武蔵の若武者:畠山重忠<中川大志>…平家方から頼朝方へ。のち時政らの策謀で滅亡。

・源氏



頼朝の乳母: 比企尼<草笛光子>…3女は伊東祐清(祐親の長男)の妻
娘: みち<堀内敬子>…比企能員の妻。

伊豆の武士: 工藤祐経<坪倉由幸>…河津祐泰を暗殺し、その子の曾我兄弟に仇討ちされる

伊豆の武士: 仁田忠常<高岸宏行>…平家追討に当たり転戦。頼家に仕え、比企能員を謀殺

相模の豪族: 岡崎義実<たかお 鷹>…義朝(頼朝の父)の館跡を守る。頼朝の挙兵に加わる

相模の豪族: 山内首藤経俊<山口馬木也>…頼朝の乳母(山内尼)の子。途中で頼朝に臣従

相模の豪族: 土肥実平<阿南健治>…頼朝が挙兵時に中村党を率い合流。安房に脱出させる

甲斐源氏の棟梁: 武田信義<八嶋智人>…武田家・当主。”富士川の戦い”では頼朝と連携

房総の豪族: 上総広常<佐藤浩市>…頼朝の東国自立を主張し、梶原景時に誅殺される

下総の豪族: 千葉常胤<岡本信人>…源氏軍の与力。のち”一ノ谷の戦い”、奥州合戦で軍功

義仲の家人: 今井兼平<町田悠宇>…義仲四天王の一人。兄=樋口兼光、弟=今井兼光

義経の従者: 武蔵坊弁慶<佳久 創>…五条大橋で義経と出会い、郎党として最後まで仕える

藤原秀衡<田中泯>…奥州藤原氏第3代当主。義経を庇護する。

文覚(モンガク)<市川猿之助>…配流された伊豆で頼朝と知遇を得る。神護寺を中興。

「源 頼朝」<大泉 洋>…久安3年(1147)～建久10年1月(1199) (53歳)

・清和源氏の一流・河内源氏の源義朝の三男として生まれ、”平治の乱”(1160年)で父・

義朝が敗れるが、伊豆国へ配流されたあと伊豆・房総の豪族らと再起を図る。

- ・伊豆で以仁王(モチヒトウ)の令旨を受けると北条時政、義時などの坂東武士らと平家打倒の兵を挙げ、鎌倉を本拠として関東を制圧。その後、源(木曾)義仲や平家を倒し、戦功のあった末弟・源義経を追放の後、奥州合戦で奥州藤原氏を滅ぼし。建久3年(1192)に征夷大將軍に任じられて鎌倉幕府を樹立する。
- ・頼朝の死後、嫡男・頼家が跡を継ぐが、御家人の権力闘争によって源氏の嫡流は断絶し、その後は、北条氏(得宗家)が、執権として鎌倉幕府を支配した。

・平家

コレモリ

- 重盛…父に先立ち病死 ———— 維盛<濱正悟>…”一ノ谷の戦い”で遁走?
 - 清盛 ———— 基盛…24歳で早世
- <松平 健>
- 宗盛<小泉孝太郎>…清盛の後継者。壇ノ浦の戦い後、鎌倉に送られ斬殺
 - 知盛…”壇ノ浦の戦い”に敗れて入水自害

相模の豪族:大庭景観<國村 隼>…平家方の武士。”石橋山の戦い”で頼朝軍を破る。

「平 清盛」<松平 健>…建久6年(1118)1月～治承5年(1181)閏2月 (64歳)

- ・平忠盛の嫡男として生まれて平氏棟梁となり、保元の乱(1156年;朝廷の内部抗争)で後白河天皇<西田敏行>の信頼を得て台頭。平治の乱(1160年)で源義朝らに勝利して武士としては初めて太政大臣に任じられ、日本初の武家政権を打ち立てた。(平家政権)
- ・その後、平氏の権勢に反発した後白河法皇と対立し、治承三年の政変で法皇を幽閉して安徳天皇(母=清盛の娘)を擁し政治の実権を握るが、平氏の独裁は公家・寺社・武士などから大きな反発を受け、源氏による平氏打倒の兵が挙がる中、熱病に罹り没する。

「治承・寿永の乱」(源平合戦)…治承4年(1180)～元暦2年(1185)

- ・治承4年(1180)、安徳天皇の即位で皇位継承が絶望となった後白河法皇の第3皇子・以仁王が、源頼政の協力を受け、平家追討・安徳天皇の廃位・新政権の樹立を計画した令旨を発する。しかし、この企てが発覚して以仁王らは、平知盛らが率いる平家の大軍の攻撃を受け、同年5月、宇治の平等院で戦死するが、この挙兵が6年間に及ぶ内乱の契機となり、最終的には、源氏が平家を壊滅し、新たに鎌倉幕府が樹立される。

・”富士川の戦い”(10月)で平維盛らが率いる平家軍を破った源頼朝は一旦鎌倉に帰還して侍所を新設し、和田義盛を別当、後に梶原景時を所司に任じる。

・寿永3年(1183年)4月、平家は北陸の反乱勢力を討つため平維盛率いる大軍を派遣するが、5月に倶利伽羅峠で木曾義仲軍に敗北し、義仲はそのまま上洛する。京都の防衛を断念した平宗盛は、安徳天皇や三種の神器を保持しながら都落ちして西国に逃れる。この時、比叡山に脱出した後白河法皇は頼朝に使者を送って上洛を促すが、頼朝は逆に法皇から宣旨発布を求め、東国支配権を政府に公認させる。

・頼朝は義経らを上洛させ、さらに弟の源範頼を援軍として派遣して”宇治川の戦い”で、義仲軍を打ち(義仲は近江粟津で戦死)、幽閉されていた法皇の身柄を確保した。

- ・後白河法皇<西田敏行>…晩年は東大寺の大仏再建に取り組む。建久3年(1192)3月崩御
- 以仁王(モチヒトウ)<木村 昴>…後白河法皇の第3皇子。源氏に平家追討の令旨を発する。
- 丹後局<鈴木京香>…後白河法皇の寵姫。後鳥羽天皇の擁立を進言。頼朝とも親密な関係
- 平 知康<矢柴俊博>…後白河法皇の側近。入京した義仲討伐を法皇に進言
- 源 頼政<品川徹>…平氏政権下も朝廷にとどまった源氏。以仁王の令旨に関わり自害

以上